

佐藤さん



すずきみるく

今週は「佐藤さん」が帰ってくるから会えない。そう告げると恋人は短い沈黙の後、「わかった」と感情を押し殺した声で言った。電話ごしでもどんな顔をしているのか手に取るようにわかる。雨に打たれた子犬みたいなしょぼくれた顔。これで今週末の予定が全て白紙になった。今週は恋人とアカデミー賞を受賞した映画を見た後、ラブホテルで一晩中愛し合うつもりだった。恋人は一日に何度もセックスをするし、その合間の時間に服を着ることも許してくれない。ベッドの中でも浴室でも裸で抱き合っ、ホテルのテレビすらつける暇もないほどぎゅうぎゅうに愛し合うのが週末のお決まりのデートだった。恋人との時間を言葉にするならば愛だけでみっしりと詰まった時間だと私は答えるだろう。愛のある時間。そんな生活が1年近く続いている。

佐藤さん、というのは別居している私の夫の呼び名だ。離婚をしていない以上、私も佐藤さんではあるのだけれど、恋人は一度も私を佐藤さんと呼んだことはない。最初は夫のことを旦那さんと呼んでいた恋人が、「佐藤さん」と呼ぶようになったのはいつからだろう。旦那さんが居るなんてやっぱり嫌だよ。子供みたいに拗ねた声で恋人は言う。そしてそういわれるたびに自分の心の一部がくしゃっと潰れた。

「佐藤さん」とちゃんと話し合っ、てね。すぐに離婚できないことはわかってるけど、少しでも前に進んで欲しい。恋人は言い、がちやりと電話は切れた。ごめんね、と思いながら私は心が軽くなるのを感じる。嘘を吐いた罪悪感と電話と一緒に消えた。

「佐藤さん」は来ない。初めから約束なんてなかったのだ。そして恋人も来ない。私は自分が自由であることを感じる。週末二日間の自由。電話を乱暴に放り投げて、フローリングの上に寝転びながら手足をじたばたさせてみる。私にはこのちっぽけな自由がお似合いだ。本当の意味で自由になってしまったら、私は行き場を失ってしまうし、途方にくれてしまう。冷蔵庫の中はがらんとしていて、ビールと一リットル入りのジンの青い瓶だけが異様な存在感を放っていた。あとは干からびたチーズと、賞味期限の切れた納豆ぐらいしかない。唐突に空腹を感じたけれど、買い物に出かけるのも面倒で、干からびたチーズを着にロックでジンを飲むことにした。ボンベイサファイアは適度に身体にしみこむようなハーブの匂いがする。

恋人はきっと傷ついているのだろう。いつまでたっても別れ話の進まない私と「佐藤さん」の関係に。嫌いなら別れればいいのに。どうして別れられないの、もう好きじゃないんでしょう？ ひどく酔ったある日、恋人は私に言った。そんな単純なことじゃないのよ、離婚するってことは。結婚経験のない年下の恋人に私は言った。恋愛とは違うの、結婚するってことは相手の全てを引き受けることだから、嫌いになったからといって別れられるわけじゃない。恋人を諭す言葉は同時に自分にのしかかる。結婚は恋愛とどう違うのだろう？

佐藤さんよりも自分のほうが幸せに出来るよ、だから俺についてきて欲しい。恋人にそういわれることは嬉しいはずなのに、私は憤慨した。彼はあなたと違うわ、だからどっちが上だとか幸せだとか考えられない。夫を不用意に傷つけたり馬鹿にされることは不快だった。自分でも驚く

ほどに。一ミリの隙間も許さないほどぎっちりと抱き合って、信じられないくらい気持ちのいいセックスをしているときも、呼吸が止まりそうなほどキスを浴びせられるときも、恋人は私の向こう側にいた。そのくせ、顔を見なくても、声すら聞かない日がどれだけ続いていても、「佐藤さん」はこちら側の人間だった。

愛情だけが全てだとは思わない。でも愛情を信じて結婚したはずだった。それなのに私は夫の愛情を見失い、恋人の愛情を信じられずにいる。干からびたチーズをちびちびかじりながら、これは自由ではなく猶予期間なのだと知る。ジンのアルコール臭さが鼻をついて、私は少しだけ泣きそうになった。